

蕉門秘傳良藥抄

中村俊定文庫

文庫 18

1006

7

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

蕉門秘傳良藥抄





此は薬妙といふ化も知れり



好まざるを棄てたるに初めは條々為政の道
 取らざる輯りたる中国の如く隆をきりけり
 是より遠く新嘉坡の如く明軍陣の
 法を如胸の如く花梅の如く隆の如く
 いふの如くもあつた（法をきりけり）
 月（月）（月）（月）（月）（月）（月）（月）（月）
 とるゝとるゝとるゝとるゝとるゝとるゝとるゝとるゝ
 を増果つては増果つては増果つては増果つては

解 けりて 文の 写本の 修正 後人 能く

考て 改く

一 秘の 傳 門の 記 秘の 目 秘

十五條 秘 十七條 秘 奥細道 秘

秘傳 秘 秘の 秘 東西夜話 秘

古今抄 秘 玉水抄 秘 良抄 秘

清和物語 秘 篇突 秘 新法集 秘

宇多法師 秘 弱法師 秘 葛原系 秘

續五編 秘 白蛇尾 秘 夢野文 秘

能陳 倭文選 秘 秘語口授

秘川書 秘 秘の 秘

之 秘 秘の 秘 秘の 秘

論 秘 秘の 秘 秘の 秘

秘 秘の 秘 秘の 秘

秘 秘の 秘 秘の 秘

一 良抄の 内 秘 秘 秘 秘

融院の永如元乙卯年初夏に特進而相如歌
 のてはやはもろ様に侍てんと速化をう
 きたりて一と云ふ廣くの時なりしと
 將軍の伝名京寛永十九年以降彼為京之
 負とて一と云ふ一と云ふ後に備一と云ふ
 一と云ふ細く一と云ふ保十六年思
 一と云ふ其由江古あるも他一と云ふ

切紙秘傳より手抄

連紙うねり年目録より條

一 親父の事 一 神父の事

一 六 義 一 比 祈

一 四 道 一 賦 祈

一 正 親 父 一 眼 對 云

一 祈 禱 一 退 善

一 神 祇 一 兎 咀

一 軍 陣 一 切 字

一 花 機 一 機 祀

うみりの多し ちまへに遠くへ 花の脈
れこの口はきこ^又 ちまへに遠くへ 花の脈
うみり

いのと遠の山にまを
きこし 花の脈と

何れもいふてきこし 花の脈と
花の脈と 花の脈と 花の脈と
花の脈と 花の脈と 花の脈と
花の脈と 花の脈と 花の脈と
花の脈と 花の脈と 花の脈と

心のかやのちまへに 花の脈と
花の脈と 花の脈と 花の脈と
花の脈と 花の脈と 花の脈と
花の脈と 花の脈と 花の脈と

一正の脈と 花の脈と 花の脈と

花の脈と 花の脈と 花の脈と

花の脈と 花の脈と 花の脈と
花の脈と 花の脈と 花の脈と
花の脈と 花の脈と 花の脈と
花の脈と 花の脈と 花の脈と

夕月夜をわうゆの秋文を

いも夕月夜をわうゆの秋文を

もみり月や新瑞にあらん

五孝

才三

白きと花のみおのふはき

昌七

才三

是ふの秋をわうゆの秋文を

の秋をわうゆの秋文を

名才三は秋文をわうゆの秋文を

秋文をわうゆの秋文を

秋文をわうゆの秋文を

いも夕月夜をわうゆの秋文を

と

花の秋文をわうゆの秋文を

花の秋文をわうゆの秋文を

花の秋文をわうゆの秋文を

花の秋文をわうゆの秋文を

花の秋文をわうゆの秋文を

才四 風神をわうゆの秋文を

才三の月夜をわうゆの秋文を

是る秋に十の秋文をわうゆの秋文を

たりり秋文をわうゆの秋文を

才

五。まにまにたれな歌。ふもたにまにまにたれな歌。七。まにまに
神のまにまに神のまにまにたれな歌。九。まにまにまにまに
十。まにまにまにまに

十一。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
十二。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
十三。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
十四。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
十五。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに

十六。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
十七。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
十八。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
十九。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
二十。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに

見歌多し。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに

才五 四道本

七。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
八。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
九。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに
十。まにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまにまに

大意
取

ふこけをききいふはふりて
はるかにふりてはるかに

ふこけをききいふはふりて
はるかにふりてはるかに

ふこけをききいふはふりて

はるかにふりてはるかに

有門室門非門亦室門の四品とあれ 佛祀

ふこけをききいふはふりて 懐紙

四枚もふりてはるかに 四道は四生を

はるかにふりてはるかに 四生は胎生

人獣の胎即生禽畜も胎生魚陸化生も胎

生云々所方も四生を基つて極す之附方四を別他方

才六賦のうへに

中園抄の義をふりてはるかに 是れ極すもうへに

才一に附るは

あつて

才ハ胎を附る極す

ふこけをききいふはふりて

白くふりてはるかに

極すは白くふりてはるかに

元霽風梳新髮柳冰消浪洗舊苔髻ヒゲ髻

洞
口朝
吐
一
片
雲

冰消風浪

新柳繫
舊苔

洗梳
如此

山頭夜載孤月輪
山影入門推不出

洞口朝吐一片雲
日光布地拂亦生

は就の字よりけに限る。就を今と処するは就の字を
 此の字の一也。此の字は金とる。一は金とる。一は
 此の字は金とる。一は金とる。一は金とる。一は金とる。

余以
此
爲
一
時
之
計
也
視
服
子
所
三
客
人
志

以
唐々帝
やうな
秋
是

宗碩 啓 永代におはせとてやうに
なするを

廿五條
己に於て
方々所々
於て之を
とて之を

て
ハ
（ウクスツヌ）

雲々
あふん
そと
ふに
ウクスツヌフル
五音
うて
押

卷之四

部
知

小麻の服
 ゐにちしき
 汗をぬぐ

多る暇中いりけりなりけり 柳字好くぬき入し
とる多るなりけり心持ありけり 万葉集なりけり
詠ふに似たり 柳字好くぬき入し 何れも句毎に
句字の水なりけりなりけり 是大事の秘なりけり
知くの人なりけり 同くは金なりけり 病難くなりけり
なりけり 万葉集なりけり 柳字好くぬき入し

廿 十六 花は梅梅

梅は梅梅花

花は梅梅花 万葉集なりけり 柳字好くぬき入し
何れも句毎に 句字の水なりけり 是大事の秘なりけり
知くの人なりけり 同くは金なりけり 病難くなりけり
なりけり 万葉集なりけり 柳字好くぬき入し

あや

花は梅梅花 万葉集なりけり 柳字好くぬき入し

うつらやきてきくし 万葉集

良徳

花は梅梅花 万葉集なりけり 柳字好くぬき入し

まつりやきてきくし 万葉集

花は梅梅花 万葉集なりけり 柳字好くぬき入し

うつらやきてきくし 万葉集

まつりやきてきくし 万葉集

あやきつてきくし 万葉集

あふそとあるかあをよきもくみちを

いふさくけふにいふさくさ

おそいふの花を日にお

第^五と所^五列^五の^五花^五

毎年^五もや^五あ^五る^五の^五花^五

終^五る^五と^五終^五る^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

あ^五る^五花^五の^五花^五の^五花^五

中武連の御意いさうと世のうゝと
つゝとて

才十八 何の病

才十九 何の病

才廿 何の病

才廿一 何の病

才廿二 何の病

才廿三 何の病

才廿四 何の病

才廿五 何の病

才廿六 何の病

才廿七 何の病

才廿八 何の病

才廿九 何の病

才三十 何の病

才三十一 何の病

才三十二 何の病

才三十三 何の病

才三十四 何の病

一 翁白くしるる事 （？）

ふとふと、月やうきふと （？）

何となく （？）

天よとて （？）

（？）

（？）

（？）

一 身とるる事 （？）

（？）

（？）

（？）

（？）

（？）

（？）

（？）

（？）

（？）

又

ところにはさう極く伊勢の如きものも無いと云ふこと
ハ根の極くさうなものは無い

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの
花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの
花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの
花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

花の極くさうあるのは花の極くさうあるもの

[illegible]

一 御座るに凡張定字をかきし、然いまだ可い能は
て御座る相を、御座る言も高き金も、うへに
月智花のうへに、あまの神も、さあけで
とわかれは、月をもあやめ、はあ、人神連
親も、御座る神あり、御座るも、神とて、
なにも、先御座の根え、い、事
も、興つ、あ、ひ、事、好
よ、御座る、に、下

並つゝ月つゝもわが心は月
 愛をいひつゝ心をもとにし美しき面し
 ともおそふの情をあらは
 排遣の神の如く
 月かしとほ西の事也

かきつるの心とてまよはぬ
都れうはる今やつらん
まをうたえそしや酒を
字燈

芦花の月よかきし便

一 本ノ夕ノ著の字 以テ 智國志 古くまで吾等

のふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

相傳秘抄

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

此
文
附

オ一と秘抄

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

ふふふふふふふふふふ

オニ

ふふふふふふふふふふ

此
文
附

何れも明らぬを

中こそをふいてあやう

是のうへをさきたふををいいてあやう

多にうへのはたはた

まのふ峰のあやう

ふきくひくを神い

はうにうへを

さきく入野のあやう

うへにうへに

はうにうへに

あやう

はあまわとて
一と新れ
はあまわとて

うへにうへに

姉少活代にうへに

のうへに

ウクスツヌ

くまぬふにうへに

うへにうへに

うへにうへに

うへにうへに

おれは神ぞとて梅の花
うらふ。多に雪のさ。

其のつとめれに花をうゑて押へておもうに
 其の啼はる花の啼のつとめれに
 一つとめれに花をうゑて押へておもうに
 一つ

あまのうきをうたふ

山崎 久 仙 子 記 二

は押字と云ふ
 子南と云ふ
 と云ふ
 と云ふ
 秋風
 之上
 秋風
 之上

今日記此

不為心澤

秘のいずものぬし

志
也
今
日
也
上
山
里
下

小倉に松本
明

東海の
あま
あま
あま

4
 1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 5

[illegible]

うねりしきぬ川波年ぬも
あけとくは水のしきと

養
代
と
ろ
ろ
水
の
ほ
ろ
ろ

[illegible]

中五
くさのゆき

此字爲我
知何事

まの五音
あをきすへ
月こけえん
上ヶセテ子へメエ也

[illegible][illegible]

高麗王
御書

[illegible]

なまふちのちあ

ら
に
ら
よ
に
に
ら

知

多きやとて我々も思ふ
 物にほめてゐるに

安
之
以
之
珍
庶

志に在る

月
刻
刻
知
押
不

月よ
己れを
うみ
ふに
又
あまら

秋の風

又、
し
し
し
し
し

事をのこそと二字をゆゑに
きつて一に

息子に十九てにはともふ^ふ下る十二のそふと
 如と

子海如行是子深是又

下
下
下
下
下

ちのてはうむ

人
の
心
に
あ
る
を

此乃二君之志也

下子^心の^心年^心下子^心の^心西^心月

心
止

魚酒中三杯遊河亭川

君が代まで

此五文字不

血の海を渡るの事なりと云ふべし
 洲のつちをあらはし是上の神宮をあら
 く神をあらはしと云ふべし
 海を渡るハ心海を渡る也と云ふべし
 心海を渡るハ心海を渡る也と云ふべし

第六の字も

十
二
条
十
四
条
と
と
や
の
字
に
松
と
先

和字七の
江戸
あゝ
名主
知
く
も
れ
な
し

一切也

一
中
書

一
字

王
子
之
子
也

一 部
や
う
む
と
あ
そ
ろ
と
あ
は
れ
し
め

一はふ

品屋よりとある
又いふは
権量より
御

まゝ

おかしな事だとは思ふが、
おかしな事だとは思ふが、

口含

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

おかしな事だとは思ふが、

神のまゝ

その川に流るる水は

いかに清く流るる

そのまゝに流るる水は

あつた

水は

そのまゝに流るる水は

そのまゝに流るる水は

そのまゝに流るる水は

そのまゝに流るる水は

そのまゝに流るる水は

そのまゝに流るる水は

そのまゝに流るる水は

そのまゝに流るる水は

そのまゝに流るる水は

そのまゝに流るる水は

そのまゝに流るる水は

あやとく
いづれ

たゞの屋上の松の梢

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

う

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

あやとく

ちるそのやいのけなをぬくをかく

中九とや

うくもあひぬきまじの難有

そいぬにきつてなをんや

うなをんやうなをんやうなをんや

ねもくねのむるう(はな)

まぬきまぬきまぬきまぬき

もきこ

まぬきまぬきまぬきまぬき

うなをんやうなをんやうなをんやうなをんや

才中裁まぬきまぬき

夕ねるくやうなをんやうなをんや

まぬきまぬきまぬきまぬき

うなをんやうなをんやうなをんやうなをんや

まぬきまぬきまぬきまぬき

まぬきまぬきまぬきまぬき

うなをんやうなをんや

後と云ては、
くわーとほてすー

くわーとほてすー
くわーとほてすー
くわーとほてすー

くわーとほてすー

くわーとほてすー

くわーとほてすー

くわーとほてすー

西門

くわーとほてすー

くわーとほてすー

くわーとほてすー

くわーとほてすー

くわーとほてすー

くわーとほてすー

くわーとほてすー

[illegible]

升十八
三月は
初定
後
後
後

ちのつれなくそえつねに

時
に
し
る
を
し
る
に
し
る

其ハ
其ハ
其ハ
其ハ
其ハ
其ハ
其ハ

月夜はちにあそび

是ハ
秋のやうに
あつた

牙
中
九

三
十
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

つれなき子

うきよに
まけし
に
風
鳴
に
海
古
門
子
歌

此物名之曰一

ほつゝの宮ハ 町屋をこゝろなりのうゝ

かゝる辛苦の境を去る——かゝるに於て

晴久は
明久は
明久は

上
人
之
子
弟
也

ふ
帳のつかりもさふ
いそひに
ひきとめん

壬生 志見の之
空のなほは
地を
そとす
と

うそ萩芋を思ひよる人へ
後成のふに

新波人
芳々集々
あにき

之
說
少
袖
の
何
子
成

名大ねおのや合はるねをたはるつとくも
つゝもねのふもさうしにねさうさるえちあにえ
のたつもいさうさるねにたあさう

才 才 竟入念にたあな

ねをたあさうさうさうさうさう
これそれなもさうさうさうさうさう
つゝねを

田の浦にうさうさうさうさう

ねをたあさうさうさうさうさう
これそれなもさうさうさうさうさう
つゝねを

才 才 ねをたあさうさうさうさう

ねをたあさうさうさうさうさう
これそれなもさうさうさうさうさう
つゝねを

才 才 ねをたあさうさうさうさう

秋のねに月さうさうさうさう

ねをたあさうさうさうさうさう

ねをたあさうさうさうさうさう

そもお字にこそはなれど、かゝるもの

七ヶ條に依りてはなれど

才こ をまゝにひきかへ

才こ ひとのいふこと

才に けふ

才ぬ まゝのまゝ

才ふ まゝのまゝ

才七 まゝのまゝ

才と 裁

おひかへ

うゝくはく

ちり

おひかへ

おひかへ

おひかへ

おひかへ

おひかへ

おひかへ

おひかへ

おひかへ

おひかへ

おひかへ

おひかへ

以いふ破りてのやなれりといふ
 大にゆくの通れり
 是れとて出玄にはきこはるの肝意
 又智のやなれり
 美うりてきこはるの通れり
 是れとて出玄にはきこはるの肝意
 かゝるにいふにきこはるの通れり
 是れとて出玄にはきこはるの肝意

大にきこはるの通れり
 かゝるにいふにきこはるの通れり

山川の光もきこはるの通れり
 是れとて出玄にはきこはるの肝意
 かゝるにいふにきこはるの通れり
 是れとて出玄にはきこはるの肝意

白氏文集

琴詩酒な皆地我言月花時最憶君
 此時ト云字ヲ頃前ト云リ

うゆる連なるを表わすの字もふくまひて
批すけれども御鑑にはふきとけのいさ

山根路をふたへてふくまひて

沖のふたに浪のふくまひて

うきふくまひ 波のふくまひ 海のふくまひ

立つてくまひ 池のふくまひ

海田ふくまひ 龍葉のふくまひ 雲のふくまひ
今ふくまひ 浪のふくまひ 雲のふくまひ

都ふくまひ 雲のふくまひ 雲のふくまひ
都ふくまひ 雲のふくまひ 雲のふくまひ





